清宗根付館 便り　**当館ホームページのリニューアルのお知らせ**

昨年はInstagram、Twitter 公式サイトでの発信に際し、多くの方々にご覧いただきましてありがとうございました。本年度はホームページのリニューアルを計画しております。今回のリニューアルでは作品・建物・歴史・文化などの様々な視点から『根付ファンの皆様に楽しんでいただけるサイトを開設したい』との思いを実現すべく、当館のバックアップをしております、佐川印刷株式会社・SPメディアテック株式会社の協力を得て、昨年9月から協議を重ねてまいりました。開館以来のデザインを一新し、最新技術を取り入れたヴァーチャルミュージアムを目指しています。技術的な難題も多々ありますが、未だ感染症の影響下で、当館への来館が困難な方々へも「根付」の魅力をお伝えできるよう取り組んでおります。さらには毎月の企画展や開館基本情報から、当館独自に行う根付研究の成果や現代根付作家の作品情報まで充実した内容でご提供するようスタッフ一同取り組んでおります。スマートフォンやタブレットにも対応しますので、ご来館の際の実物作品の鑑賞と共に、ホームページのヴァーチャルミュージアムをご堪能していただけば幸いです。

根付研究 最前線「非日常と日常の＜境界＞で」

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員　**大西 忠雲**

帯に袋物を装着させる際、そもそも着脱のための留具（小器具）は必要なのだろうか。袋物の紐を直接帯に絡げれば、留具は不要なのではないか。こうした「ない」ものが「ある」ものへ、そして名を得て認知されるものへという根源的でロマンチックな問いが、筆者を根付研究へと誘いました。

というのも、帯はもともと胴に巻いて縛る細い紐状のものでした。刀は帯に差して（吊るして）使用されていたことからも、帯は道具を装用する機能を備えていました。そうであるならば、なおさら、留具の出る幕などありません。

根付という語が記された前史である、中世（11 世紀後半 ～ 16 世紀）に描かれた資料の内、とりわけ絵画資料はこうした事情を今に伝えます。この時期に描かれた絵巻等から、袋物の佩用例を拾い上げてみれば、護身用などで使用された柄の無い腰刀の鞘に紐で吊されているか、あるいは、丸腰に直に吊るされ描かれています（*1）。筆致から判断が難しいところはありますが、ともあれ、袋物の佩用を描く際、袋物を着脱するための留具は描かれていません（図1・図2）。

では、こうした事情を文献に求めればどうでしょう。管見の限りでは、史料の希薄さは否めませんが、ここでもやはり留具についての記述はありません。こうした絵画・文献の両資料から、少なくとも、袋物を帯に吊るし佩用したことと、佩用の際に袋物を小器具で着脱する必要があったとすることとは、別の問題といえるでしょう。なお、刀と袋物の携帯は、井戸が指摘する通り、『古事記』（8世紀）の東征を前にした倭建命（ヤマトタケルノミコト）の件や、後撰和歌集（958年）に収められた和歌などに散見されます（*2）。

次に、絵画資料で描かれた袋物の担い手の属性に改めて着目してみれば、旅人、商人、従者、聖といった主として移動を必要とする者に袋物が描かれ、対して、市井の大多数の者には袋物が描かれていません。そうでるならば、和装には洋装のようなポケットが無かったため、袋物を必要としたという議論にも、もう少し歴史性を反映させる必要があるようです。

いずれにせよ、筆者は、倭建命の東征にしかり、こうした移動、あるいは戦といった非日常に袋物が描かれ、対して日常に袋物が描かれていないこと、つまり、非日常と日常の＜境界＞にこそ、留具が誕生する契機が潜んでいるように思えます。加えて、袋物の佩用が左の腰にあることにも注目されます。

＜参考文献＞
*1、渋沢敬三伝記編纂刊行会『絵巻物にみる日本常民生活絵引』平凡社、1984
『当麻曼荼羅縁起』鎌倉初期、「男衾三郎絵詞」永仁三年(1295年)頃、『一遍聖絵』正安元年(1299年)頃、『春日権現験記』延慶二年(1309年)、『絵師草紙』鎌倉末期、『石山寺縁起』正中年間(1320年～26年)、『暮帰絵詞』観応二年(1351年)。
*2、井上文人『日本嚢物史』思文閣、大正八年

図1
土佐長隆他、『蒙古襲来絵詞 写本』巻二 、
作者不詳、『蒙古襲来絵詞』、永仁元年(1293年)
蒙古襲来合戦絵巻. [2] - 国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)

掲載図は国立国会図書館に収められた土佐長隆他による写本(1817)の一部を用いた。なお、一部に於いて、近世の加筆・改竄・編集された箇所があるとの指摘がある。

図2
鈴木空如他、『暮帰繪々詞 写本』巻七、
大正八年～九年(1919年～1920年)
藤原隆晶他、『暮帰絵詞』、
正平六年(1351年・1482年)

慕帰繪々詞 10巻. 巻7 - 国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)

掲載図は国立国会図書館に収められた鈴木空如他による写本(1919年)の一部を用いた。

2022年 7月～9月の特別企画展のご案内　**地球バンザイ! 根付の楽園**

7月「根付水族館」展	8月「根付動物園」展	9月「根付植物園」展
■ 7月1日(金)～31日(日)	■ 8月2日(火)～31日(水)	■ 9月1日(木)～30日(金)

京都 清宗根付館　公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

公式サイトはこちらから▶

コロナウィルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- 入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします（37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせて頂く場合がございます）。
- 万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。

公益財団法人 京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長CEO 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、＜魅せる＞＜育む＞＜繋がる＞を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

SAGAWA PRINTING　佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

宗 Salon
現代根付
Contemporary Netsuke Newsletter

SPRING ~SUMMER　Issue. 08

［目 次］

■ 企画展のご案内
■ 企画展の見所
■ 清宗根付館便り
■ 根付研究最前線

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

美術か?工芸か? 日本彫刻最大の謎『根付のたくらみ』展

根付は作家の美意識が表出された芸術性と卓越した技巧が駆使された工芸美が融和され、美術と工芸の十字路に位置しています。そもそも根付は印籠などの提物（さげもの）の留め具です。腰に提物を佩く風習は世界にも散見されますが、実用の域を出ず、根付のような装飾を施した類例は発見されていないことから、根付は日本独自の美術工芸品とされます。その根付の特徴を示しているのは江戸時代の天明元年（1781）刊の『装剣奇賞』で、根付工56名（再販で1名追加）が紹介され、仏師、能面師、絵師、蒔絵師、欄間師、入れ歯師、鋳物師などと列記している点です。これは根付には諸種の職人たちが参加し熟達した技芸を競い合った証左であり、それまでの日本の彫刻や工芸様式のすべてが根付に集約されたと推断できます。賞玩の美術品と、愛玩の工芸品の領域をせめぎ合いながら、世界に類を見ない日本独自の彫刻表現として明治以降欧米でも高い評価を得ました。なぜ日本にだけ根付が発生したのか、これは日本彫刻の最大の謎とされといます。美術なのか、工芸なのか?その曖昧な境界線を軽々と行き来しながら現代でも継承され、日本美術のひとつの到達点としてさらに拡張を続けています。本展では根付に秘められた謎の解明を試みるべく、根付の細密技巧に焦点を当てその一端を紐解きます。

告知ポスター

2022年4月～6月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

4月 加飾と巧緻の彩り豊かな世界 ■4月1日（金）～30日（土）

「金工と象嵌の華麗な挑戦」展

贅を凝らした金工や象嵌には数種類の特性が異なる素材を嵌め込む熟練の技術が必要とされます。金工は江戸時代に刀装具において世界最高水準の技術に達しました。その後西洋の宝飾技術が導入され、平成には宝飾や貴金属加工から根付作家への参入もあり、現代根付において重要な存在となりました。また象嵌の古例は正倉院に「木画紫檀槽琵琶（もくがしたんのそうのびわ）」などの作例を先駆として、金工象嵌、木工象嵌、陶象嵌などに応用され、根付でも象嵌技術が使われました。明治時代には芝山象嵌が欧米への輸出品として一世を風靡したのち、現在までその技術が伝えられ、根付においても精緻な作風で受け継がれています。

吉見 普光（ひろみつ）（1954～）
「藪猫」 高4.2cm
銀・べっ甲・鹿角・黄銅

全面に透かしで植物を配置した柳差根付で、抑えた銀色が猫を引き立てる。猫の視線の先には極小の蟷螂が。

宮崎 輝生（1936～）
「花籠」 高5.1cm
黒柿・白蝶貝・象牙・べっ甲・漆・銀・黄蝶貝・珊瑚

天然素材をすべて削り出し素地から浮き上げて象嵌を行う芝山技法が装飾効果を高めている。

上原 万征（1975～）
「自粛猫」 高5.3cm
鹿角・銀

緊急事態宣言下の自粛をテーマにした作品。猫が抱えるパソコンは鏡蓋で着脱できる。

黒岩 明（1949～）
「りんご」 高3.9cm
黄楊・プラチナ・18金・エメラルド

可食部でない種がエメラルドという逆転の発想に彫金技法が発揮されている。知恵の実を測る尺取虫がユーモラス。

宍戸 濤雲（1960～）
「家守」 高4.3cm
黄楊・銀・18金

木片の上のヤモリは餌を探し、裏にはバッタが身を潜める。マチエールの違いがコントラストを際立たせている。

5月 蒔絵と螺鈿が織りなす装飾美 ■5月1日（日）～31日（火）

「漆芸の典雅な味わい」展

漆は海外で「JAPAN」と呼ばれるほど日本特有の発展を遂げました。漆は温暖湿潤な環境で育つことから日本では、縄文時代早期から使われていました。日本各地で独自の技法が伝えられています。江戸時代には根付や印籠にも使用されました。箆（へら）や刷毛で漆を塗る髹漆（きゅうしつ）は美しい塗り肌をもたらし、加えて螺鈿や蒔絵、沈金、などの加飾は華美で典雅な情趣を醸し出すことから諸大名にも好まれました。現代では伝統的技術をさらに発展させて、立体的な彫刻とともに施したり、紅花緑葉（こうかりょくよう）と呼ばれるように多彩な色漆を重ねて立体的な彫漆を根付に応用するなど現代的な試みがなされています。

針谷 祐之（1954～）
「水辺」 高3.6cm 黄楊・漆・貝・金粉

水辺の波を美しい刷毛目跡で象り、葦の葉にとまった川蜻蛉を青貝の螺鈿（らでん）高蒔絵で表す。

大下 香征（1972～）
「波濤飛鷲図」 高5.2cm
天然トルコ石・螺鈿・蒔絵

天然石への加飾は漆独特の性質で、トルコ石の斑紋を荒れた海に見立てた雄大さを感じさせる作品。

池田 朝重（1972～）
「紅花緑葉 風待草」 高2.9cm
堆漆板

朱漆や緑漆などの色漆を何層にも厚く塗り重ねた堆朱の塊りの全面に彫漆を施している。

弓削 祥陽（1947～）
「影絵遊び」 高3.9cm
黄楊・漆

歌川国芳の影絵を題材に黄楊で彫刻し、色漆で彩色している。

針谷 絹代（1959～）
「アゲハ蝶」 高4.4cm
栃・蒔絵・象牙

アゲハ蝶を研出（とぎだし）蒔絵にすることで朧げに漂う幻想的な印象を与える。

6月 神工鬼斧、迫真の彫刻美 ■6月1日（水）～30日（木）

「精緻な技巧と大胆な造形」展

根付の多くは一塊の素材から削り出す「丸彫り」から生まれます。素材を足せないために失敗が許されない緊張感は観賞者にも伝わってきます。硬い素材でありながら、今にも動きそうな気韻を湛える技巧は、到底人間業と思えないという感動とともに「神工鬼斧（しんこうきふ）」と賛美されます。根付の魅力は凝縮された造形と、誇張された表現といっても過言ではありません。日本彫刻は飛鳥時代の仏像に始まり、安土桃山の絢爛な欄間彫刻、江戸の工芸諸般の充実、明治のアカデミズムの導入、昭和の抽象主義を経て、現代の作家がどう収斂させるのかが見所です。同時にその造形を惹きたてる染色技法にも注目し、伝統的な天然の草木染めや岩絵具なども紹介をします。

山本 伊多呂（1961～）
「若冲」 高5.9cm 黄楊

万物の「神気」を描こうとした若冲（1716～1800）へ鶏が伝えたのは天啓か、それとも干渉か？想像を膨らませる。

森 哲郎（1960～）
「関羽」 高5.5cm 象牙

均整がとれた姿態と写実的な迫真性を重視している。顔からの放射状に広がる構成に、勇ましい風格を暗示させる。

糟谷 一空（1949～）
「水辺」 高5.3cm
象牙

単純化された紡錘形に物語性を融合した作品。抽象化した造形に堅固な美しさを求めたのは現代根付の特徴といえる。

及川 空観（1968～）
「少年空想探検隊」 高3.8cm
象牙

複雑な構図であっても根付らしい収まりにまとめる構成力。三人の少年や犬が注目する視線の先へドラマを誘導する。

和地 一風（1970～）
「月食」 高3.4cm
象牙・真鍮・黒水牛角・べっ甲

象牙を藍染した後に彫って白地を見せる撥鏤（ばちる）技法を応用し、地球に見立てた虎を効果的に印象付けている。